原　著

高校生へのDV予防に向けての介入研究

Intervention research on DV (domestic violence) prevention program for high school students

須賀 朋子[1)]　　森田 展彰[2)]　　斎藤　環[2)]

1）国立茨城工業高等専門学校，2）筑波大学医学医療系，社会精神保健学

1) Tomoko SUGA：Ibaraki National Colledge of Technology, 2) Nobuaki MORITA, Tamaki SAITO : Social Psychiatry and Mental Health, Faculty of Medicine, University of Tsukuba

抄　録：高校生にDV予防の授業を実施し，その効果を検討した。高校1年，2年生の合計78人を介入群として，プログラム前，プログラム後，1か月後の3回，質問紙で効果を測定した。73人を非介入群として，プログラム前と1か月後の2回，質問紙で測定を行い，比較検討した。因子分析から得られた「関係性の問題」得点と，「威圧的行為」得点のプログラムによる変化を測定したところ，プログラム後は有意に効果があらわれたが，1か月後には戻った。しかし，プログラムについて生徒から意見を聞いたところ，男女ともに1か月後も有効であると回答をしていた。これらのことから高校生はプログラムを受けたことにより知識は吸収するが，暴力やDVにつながる考え方を変化させていくには継続的なプログラムの追加が必要であることが示唆された。

Synopsis：This study examined the effects of a domestic violence (DV) prevention program for high school students in Japan. The number of intervention students and control students were 78 and 73, respectively. The intervention group was requested to answer a questionnaire three times; before the initiation of the prevention program, after the completion of the program and 1 month after the completion. On the other hand, the control group was requested to answer a questionnaire only before the program and 1 month after the program.

Based on the result of the factor analysis, we measured the scores of questionnaire on ‘recognition of controlled relationship’ and ‘coercive action’. The findings showed that the effects of ‘recognition of controlled relationship’ and ‘coercive action’ lasted for a while after the program, but one month later they disappeared and the pre-program condition was returned. However, when the views that students were asked about the program, both females and males answered that they found it useful even one month after the completion of the program .

High school students could acquire knowldge about DV through the prevention program, however, it was suggested that further efforts should be made to change their way of thinking and behavior towards domestic violence.

Key words：domestic violence, prevention, high school students

1．はじめに

2013年に東京都の若者層（18歳から29歳)を対象とした調査[1)]では男性の31.3％，女性の42.4％が1度でも交際相手から暴力（身体的暴力，精神的暴力，経済的暴力，性的暴力のいずれか）を受けたことがあると答えている（交際相手がいたことがある1,376人を対象)。そこで高校卒業前の時期にDomestic Violence（以下，DV）予防のプログラムを受けることが必要であると考えられる。日本ではNPO法人女性ネットSaya-Sayaやレジリエンスなどが中学，高校でDV予防の出張授業をはじめているが研究論文の発表は行っていない。武田ら[2)]が高校生のデートDVの認識と経験の実態を，横断的研究を行い発表はしているが，DV予防の授業を行い，効果を縦断的に測定した研究

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

はみられない。

日本でも中学生へのDV予防プログラムの効果研究は，永松ら[3]や須賀ら[4]によって研究発表が行われているが，高校生の効果研究はみられない。米国ではLove U2というDV予防プログラムが使われはじめAntleら[5]は中学3年生を対象に行い，プログラムの前後の比較で満足度，関係性の知識，自尊心のすべてが上昇したと報告している。

本研究ではLove U2を参考にして作成をした，日本の中学生向けのDV予防プログラムを高校生に試行する。須賀ら[4]の中学生の効果研究では，プログラム直後に「関係性」や「威圧的行為」に効果があらわれたが，1か月後には「威圧的行為」は効果が元に戻ってしまうことが結果から明らかとなった。DV予防の授業を受けたことがない高校生に，同じ条件でプログラムを行うことで中学生と高校生の効果に違いがあるかを検討する。

介入群にはプログラム前，プログラム後，1か月後の3回の質問紙測定を行い，短期的な効果と長期的な効果を明らかにする。また男女の効果の違いも明らかにしていく。

非介入群にはプログラム前，1か月後の質問紙測定を設けることにより，1か月後の介入群と非介入群の比較を試みる。

DVの知識のみではなくDVの被害者や加害者にもならない考え方の習得を目標として効果があるかを注目していく。

2. 方　法

1）教材（表1）

須賀ら[4]で作成をした「お互いを尊重し合う教育プログラム　人間関係を大切にするため－Domestic Violenceを知る－」のスライド教材を使用した。この教材は15項目の内容で構成されている。①から③では尊重の意味を考える形式で導入し，④では若者の間で起きているDVの例を，ストーリー形式を用いて説明している（男子が自転車を蹴飛ばして女子を威圧する場面，女子が男子の携帯電話を無理やり取り上げる場面）。⑤関係性，⑥暴力の本質について，⑦暴力の種類，そして⑧ではLenore E. Walker氏の暴力のサイクル（ハネムーン期→怒りの蓄積期→爆発期）の解説を行っている。⑨ではDVは暴力の中の1つであることの説明，⑩DVの被害者の割合，⑪DV被害に遭遇した時の対処法，⑫DVの電話相談窓口，⑬子どもへの影響，⑭「お互いを尊重できる会話」を作成するワーク形式となっている。①から⑭はスライド教材の講義，⑮ではロールプレイを生徒たちに実演してもらう形式となっている。

表1　DV予防プログラムの内容

① 人との出会いについて
② 人を尊重するってどういうこと？
③ 人を尊重できない人ってどういう人？
④ こんな時，どうしますか？男の子の立場，女の子の立場
⑤ 関係性について
⑥ 暴力とは何か
⑦ 暴力の種類について
⑧ 暴力のサイクルについて
⑨ DVとは何か
⑩ DV被害者の割合について
⑪ 身近でDVが起きていたらどうすればよいか
⑫ DVの電話相談窓口の紹介
⑬ 子供への影響について
⑭ お互いを尊重できる会話を作ろう
⑮ ロールプレイ（自分たちで作成したお互いの尊重のある会話の発表）

2）対象

2012年11月から2013年1月に，都市部における男女の比率も均等な，進学高校で介入授業を1回（50分で約40人ずつ）実施した。内訳は，高校1年生の介入群40人（男20，女20），非介入群38人（男20，女18），高校2年生の介入群38人（男19，女19），非介入群35人（男19，女16）であった。非介入群には質問紙のみを行った。介入群と非介入群の抽出は介入効果の比較を行うに当たり適切であるように，DVの授業を受けた経験のないこと等を考慮に入れて，普通科のクラスから各学年1クラスずつ学校側に無作為で選んでもらった。中学生に試行した同様の教材で，高校生にも筆頭著者が介入授業を行った。なお，筆頭著者は教員免許取得者で教職経験がある。

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

表2. DVにつながる考え方　須賀ら（2013）

*1. 暴力を振るわれるのは振るわれる方にも原因がある
*2. 好きな相手なら,暴力を振るわれても許してあげるべきだ
3. ひどい言葉や,大声で怒鳴る事も暴力である
4. 相手を脅すために,物を投げたり,わざと大きな音をたてるのは暴力だ
5. 自分の考えを押し付けたり,無理じいするのは暴力だ
*6. 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ
*7. 男性は女性を常に,リードするべきだ
*8. 好きな人には,嫌われたくないので意見を合わせる方が良い
*9. 好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ
10. 自分が傷つけられる事をされたら目上の人や好きな人にもNoと言って良い
そう思う4点，少しそう思う3点，あまりそう思わない2点，そう思わない1点
*逆転項目　そう思う1点，少しそう思う2点，あまりそう思わない3点，そう思わない4点

3）研究のデザイン

介入群，非介入群ともに同じ質問紙を行い，介入群にはプログラム前，プログラム後，1か月後の3回の質問紙調査を実施した。非介入群には，プログラム前と1か月後に質問紙調査を行った。研究校の事情で非介入群にはプログラム後の質問紙は実施しなかった。（図1）

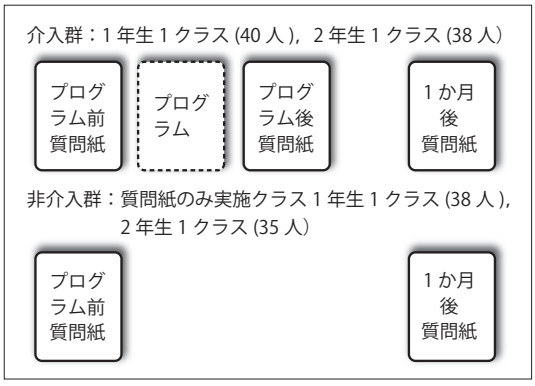

図1　研究デザイン

表3　プログラム後と1か月後の，プログラムの有効性についての質問

（直後）
1.「DVを知る」の授業は将来，役に立つと思う
2. 今後もDVの授業があったら受けたいと思う
3. DVとは自分が思っていたことより身近に起こることがわかった
4. ＤＶについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う
5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う
（1か月後）
1. DVを知るのプログラムは自分に良い影響を与えている
2. 暴力のサイクルの構造を覚えている
そう思う4点，少しそう思う3点，あまりそう思わない2点，そう思わない1点

4）質問紙の内容（表2）

「DVにつながる考え方」の質問紙を使用した。介入群は，プログラム前，プログラム後，1か月後の3回，非介入群はプログラム前，1か月後の2回，1枚ずつ質問紙を封筒に入れて，各クラスの担任教師に配布と回収を依頼し，その結果を分析した。（表3）

さらに介入群にはプログラム直後に5項目，1か月後に2項目を4件法でプログラム内容の有効性についての質問を行った。平均値得点を算出する時は「そう思う4点」「少しそう思う3点」「あまりそう思わない2点」「そう思わない1点」で算出した。

5）データの分析

高校生の「DVにつながる考え方」は因子分析と信頼性の確認を行った。因子分析によって得られた因子の，プログラムによる効果は対応のあるｔ検定を行った。介入群の「プログラム前」,「プログラム後」,「1か月後」の時点での男女間の比較は，対応のないｔ検定で解析を行った。

また「プログラム後」,「1か月後」の授業アンケートの男女間の比較は平均値得点を算出後，対応のないｔ検定を行った。

なお, IBM SPSS statistics 21.0で解析を行った。

6）倫理的配慮

研究を依頼する際に，研究校の所属長に趣旨，

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

表4　高校生のDVにつながる考え方因子分析結果

	F1	F2	因子名・α係数
*8. 好きな人には嫌われたくないので意見を合わせる方が良い	0.716	0.022	関係性の問題
*9. 好きなら何があっても相手を最優先するのが普通だ	0.662	-0.098	α係数0.75
*6 好きな相手に「いつも2人だけでいよう」と言われたら従うべきだ	0.634	0.098	平均値12.48，SD2.39
*7. 男性は女性を常に，リードするべきだ	0.595	-0.078	
4. 相手を脅すために物を投げたりわざと大きな音をたてるのは暴力だ	-0.004	*0.836*	威圧的行為
3. ひどい言葉や大声で怒鳴る事も暴力である	0.025	*0.803*	α係数0.78
5. 自分の考えを押し付けたり無理強いするのは暴力だ	0.009	*0.591*	平均値9.49，SD2.16

*は逆転項目　n=151　因子間相関　.049
平均，SDは単純加算で算出，「関係性の問題」は最大値16，最小値4，「威圧的行為」は最大値12，最小値3

プログラムの内容，質問紙の内容について，すべて説明を行い書面で同意を得た。なお，保護者に対しては学校長が通知文で同意を得た。対象生徒には質問紙への回答，プログラムへの参加は自分の意志で決めて良いこと，参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと，プライバシーの保護に細心の注意を払うこと，無記名で封筒に入れて提出すること，データは研究目的以外には使用しないことを口頭，紙面で伝えた。本研究は筑波大学医学医療系倫理委員会，第684号の承認を得て実施をした。

3. 結　果

1）高校生の「DVにつながる考え方」の因子分析（表4）

須賀ら[4]は中学生のみを対象とした質問紙結果であったため，高校生のみで因子分析を行った。

プログラム前に測定をした高校生151人の「DVにつながる考え方」の因子分析を行った結果，項目10. に天井効果があったため削除をした。残りの9項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。項目1. 2. は因子構成が2項目のため削除をした。3項目を外し，再度，分析をしたところ2因子が抽出された（固有値1以上の基準を用いた）。累積寄与率は58.65％，因子間相関は.049であった。

第1因子は「男性は女性を常にリードするべきだ」，「好きな人には嫌われたくないので意見を合わせるほうが良い」，「好きなら何があっても相手を最優先するのは普通だ」，「好きな相手に，いつも2人だけでいようと言われたら従うべきだ」の4項目から成り立っていた。支配性をもった関係性の項目を中心に構成されているため『関係性の問題』と命名した。

第2因子は「ひどい言葉や大声で怒鳴ることも暴力である」，「相手を脅すために物を投げたり，わざと大きな音をたてるのは暴力だ」，「自分の考えを押し付けたり無理じいするのは暴力だ」の3項目で成り立っていた。威圧行為が暴力であるかないかを尋ねている項目を中心に構成されているため『威圧的行為』と命名した。

「関係性の問題因子」に含まれる4項目，「威圧的行為因子」に含まれる3項目は，須賀ら[4]が行った中学生335人を対象とした結果と同様の項目が因子内に含まれていた。

各因子について信頼性係数を算出したところ，第1因子は0.75，第2因子は0.78で内的整合性はそれぞれ良好と判断した。なお，2因子共に信頼性係数が高いことが確認されたため単純加算をして平均値，SDを算出した。第1因子に関する「関係性の問題得点」は4項目のため最大値は16，最小値は4で，第2因子に関する「威圧的行為得点」は3項目のため最大値は12，最小値は3である。「関係性の問題得点」は平均値が高いほど関係性について正しく認識していることを示し，「威圧的行為得点」は平均値が高いほど威圧的行為を暴力として正しく認識していることを示す。

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

2）プログラムによる効果

①関係性の問題

介入群（男女合計）78人は，プログラム前，プログラム後，1か月後，の3回の質問紙測定を行った。非介入群は（男女合計）73人はプログラム前と1か月後の2回の質問紙測定を行った。

介入群（男女合計）78人は，プログラム前の平均値12.48 ± 2.11（16点満点）が，プログラム後には平均値13.78 ± 2.07に有意に上昇した（t (77) = -6.25, p<.001）。しかし1か月後は平均値12.50 ± 3.07と有意に下がった（t (77) = 3.48, p<.01）。

非介入群（男女合計）73人は，プログラム前の平均値12.47 ± 2.69が1か月後には平均値12.57 ± 2.61で有意な差はみられなかった（t (70) = -.59, n.s.）（**図2**）。

介入群（男子のみ）39人では平均値12.15 ± 1.86（16点満点）が，プログラム後には平均値13.10 ± 2.07に有意に上昇した（t (38) = -4.00, p<.001）。しかし1か月後には平均値12.33 ± 3.52と有意な差はみられなかった（t (38) = 1.83, n.s.）。

非介入群（男子のみ）39人ではプログラム前の平均値12.15 ± 2.56が，1か月後は平均値12.02 ± 2.53で有意な差はみられなかった（t (38) = -.27, n.s.）（**図3**）。

介入群（女子のみ）39人ではプログラム前の平均値12.82 ± 2.21（16点満点）が，プログラム後には平均値14.46 ± 1.86に有意に上昇した（t (38) = -5.00, p <.001）。しかし1か月後には平均値13.00 ± 2.47と有意に下がった（t (38) = 3.47, p<.01）。

非介入群（女子のみ）34人ではプログラム前の平均値12.65 ± 2.88が，1か月後は平均値12.90 ± 2.71で有意な差はみられなかった（t (38) = -.52, n.s.）。（**図4**）

②威圧的行為得点

介入群（男女合計）78人は，プログラム前，プログラム後，1か月後，の3回の質問紙測定を行った。非介入群は（男女合計）73人はプログラム前と1か月後の2回の質問紙測定を行った。

介入群（男女合計）78人は，プログラム前の平均値9.96 ± 1.81（12点満点）が，プログラム後

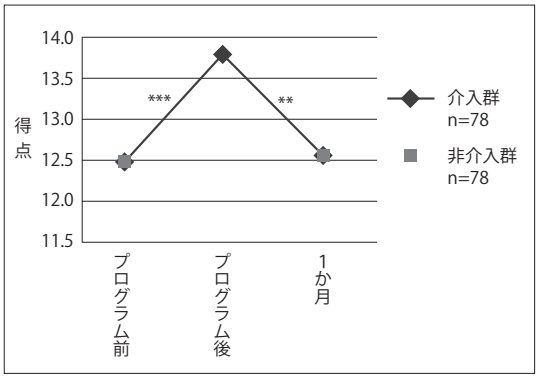

図2　関係性の問題因子（男女合計）の変化
16点満点の平均値で数値が高いほど良い
**p<.01, ***p<.001, *n.s.*=not significant

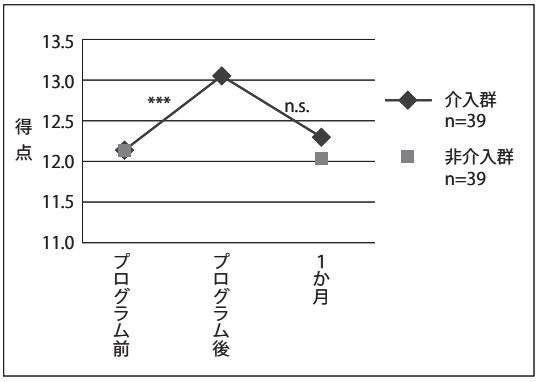

図3　関係性の問題因子（男子）の変化
16点満点の平均値で数値が高いほど良い
***p<.001, *n.s.*=not significant

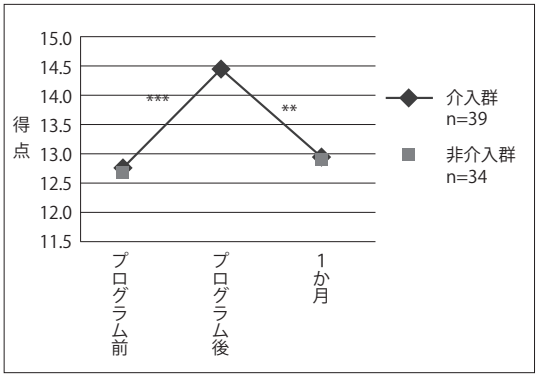

図4　関係性の問題因子（女子）の変化
16点満点の平均値で数値が高いほど良い
**p<.01, ***p<.001, *n.s.*=not significant

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

には平均値11.01 ± 1.84に有意に上昇した（t (77) = -4.92, p<.001）。しかしプログラム後に比べると，1か月後には9.71 ± 2.44と有意に下がった（t (77) = 4.39, p<.001）。

非介入群（男女合計）73人は，プログラム前の平均値8.98 ± 2.39（12点満点）が1か月後は平均値9.07 ± 2.32で，有意な差はみられなかった（t (69) = -.42, n.s.）（図5）。

介入群（男子のみ）39人では，プログラム前は平均値10.02 ± 1.67が，プログラム後には平均値10.94 ± 1.48に有意に上昇した（t (38) = -4.17, p<.001）。しかし1か月後には平均値9.74 ± 2.57と有意に下がった（t (38) = 2.78, p<.01）。

非介入群（男子のみ）39人ではプログラム前の平均値8.55 ± 2.66が，1か月後は平均値9.07 ± 2.54で有意な差はみられなかった（t (37) = -1.93, n.s.）（図6）。

介入群（女子のみ）39人では，プログラム前の平均値9.89 ± 1.97（12点満点）が，プログラム後には平均値11.07 ± 2.16に有意に上昇した（t (38) = -3.21, p<.01）。しかし1か月後には平均値9.68 ± 2.34と有意に下がった（t (38) = 3.38, p<.01）。

非介入群（女子のみ）34人ではプログラム前の平均値9.47 ± 1.99が，1か月後は平均値9.06 ± 2.07で有意な差はみられなかった（t (31) = 1.03, n.s.）（図7）。

3）因子内平均値得点の男女の比較（表5）

①関係性の問題因子

介入群ではプログラム前は，男子が平均値12.15 ± 1.86，女子が平均値12.82 ± 2.21で男女の間で有意な差はみられなかった（t (76) = 1.40, n.s.）。プログラム後は，男子が平均値13.10 ± 2.07，女子が平均値14.46 ± 1.86で女子が男子に比べて有意に関係性について高い認識を示した（t (76) = 3.05, p＜.01）。1か月後は，男子が平均値12.33 ± 3.52，女子が平均値13.00 ± 2.47で男女の間で有意な差はみられなかった（t (76) = 1.40, n.s.）。

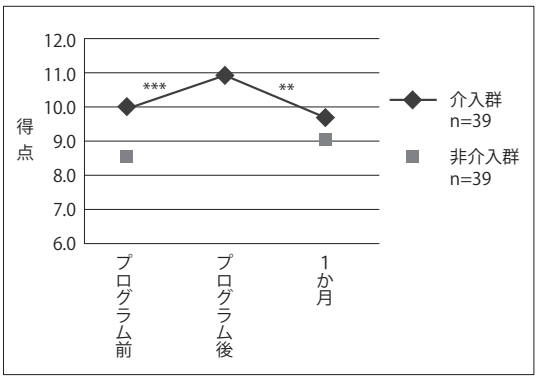

図6　威圧的行為因子（男子）の変化
12点満点の平均値で数値が高いほど良い
***p<.001, *n.s.*=not significant

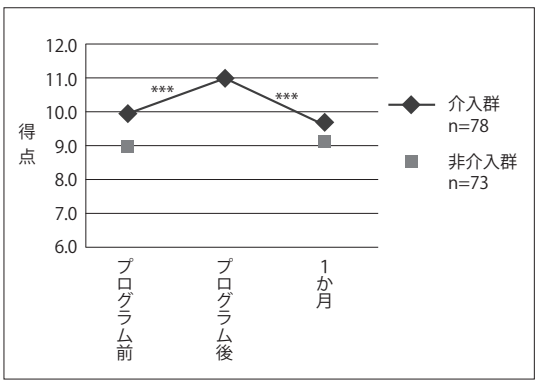

図5　威圧的行為因子（男女合計）の変化
12点満点の平均値で数値が高いほど良い
***p<.001, *n.s.*=not significant

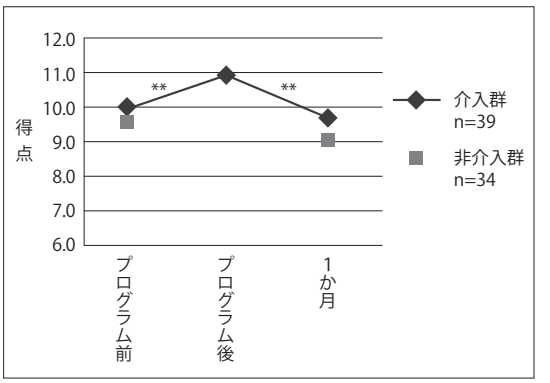

図7　威圧的行為因子（女子）の変化
12点満点の平均値で数値が高いほど良い
***p<.001, *n.s.*=not significant

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

表5　介入群と非介入群の，プログラム前，プログラム後，1ヶ月後の因子内平均値得点の男女差

		介入群			非介入群		
		男子n=39 平均（±SD）	女子n=39 平均（±SD）	*p値*	男子n=39 平均（±SD）	女子n=34 平均（±SD）	*p値*
関係性の問題因子	（プログラム前）	12.15（1.86）	12.82（2.21）	*n.s.*	12.15（2.56）	12.65（2.88）	*n.s.*
	（プログラム後）	13.10（2.07）	14.46（1.86）	**女＞男			
	（1か月後）	12.33（3.52）	13.00（2.47）	n.s.	12.02（2.53）	12.90（2.71）	*n.s.*
威圧的行為因子	（プログラム前）	10.02（1.67）	9.89（1.97）	*n.s.*	8.55（2.66）	9.47（1.99）	*n.s.*
	（プログラム後）	10.94（1.48）	11.07（2.16）	*n.s.*			
	（1か月後）	9.74（2.57）	9.68（2.34）	*n.s.*	9.07（2.54）	9.06（2.07）	*n.s.*

対応のないｔ検定　**p<.01　n.s.=no t significant　「関係性の問題因子」は最大値16点，最小値4点
「威圧的行為因子」は最大値12点，最小値3点

表6　介入群のプログラム後，1か月後のアンケート結果の男女差

（プログラム後）	男子n=39 平均（±SD）	女子n=39 平均（±SD）	*p値*
1. DVの授業は将来役に立つと思う	3.66（0.48）	3.76（0.43）	*n.s.*
2. 今後もＤＶの授業があったら受けたい	3.12（0.77）	3.23（0.67）	*n.s.*
3. DVとは自分が思っていたより身近に起こることがわかった	3.41（0.68）	3.48（0.60）	*n.s.*
4. DVについての授業の内容を友人や家族に伝えたいと思う	3.05（0.69）	3.02（0.63）	*n.s.*
5.これからの生活の中で人とより良い関係を築くために「尊重」したいと思う	3.64（0.54）	3.74（0.44）	*n.s.*
（1か月後）			
1. DVのプログラムは自分に良い影響を与えている	2.92（0.96）	3.30（0.79）	*n.s.*
2. 暴力のサイクルの構造を覚えている	2.64（0.99）	3.19（0.86）	**女＞男

4件法「あてはまる4点，少しあてはまる3点，あまりあてはまらない2点，あてはまらない1点」の4点満点の平均値得点
**p<.01，n.s.=not significant　対応のないｔ検定

非介入群では，プログラム前は男子が平均値12.15±2.56，女子が平均値12.65±2.88で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(71)=.67，n.s.）1か月後では，男子が平均値12.02±2.53，女子が平均値12.90±2.71で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(71)=.92，n.s.）。

②威圧的行為因子

介入群ではプログラム前は，男子が平均値10.02±1.67，女子が平均値9.89±1.97で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(76)=-.31，n.s.）。プログラム後では，男子が平均値10.94±1.48，女子が平均値11.07±2.16で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(76)=.31，n.s.）。1か月後も男子が平均値9.74±2.57，女子が平均値9.68±2.34で男女の間で有意な差はみられなかった(ｔ(76)=-.11，n.s.）。

非介入群では，プログラム前は男子が平均値8.55±2.66，女子が平均値9.47±1.99で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(70)=1.64，n.s.）。

1か月後では男子が平均値9.07±2.54，女子が平均値9.06±2.07で男女の間で有意な差はみられなかった（ｔ(70)=-.03，n.s.）。

4）介入群のプログラム後，1か月後のアンケート結果（表6）

①プログラム後の男女差

介入群（男子39人，女子39人）に，プログラム後のDV予防の授業についてアンケートを行った。4件法で「あてはまる4点」，「少しあてはまる3点」，「あまりあてはまらない2点」，「あてはまらない1点」で平均値得点を算出した。「1.DVの授業は将来役に立つと思う」（ｔ(76)=1.00，

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

n.s.)，「2.今後もDVのプログラムがあったら受けたいと思う」（t (76)＝.63, n.s.)，「3.DVとは自分が思っていたことより身近に起こることがわかった」（t (76)＝.53, n.s.)，「4. DVについてのプログラムの内容を友人や家族に伝えたいと思う」（t (76)＝-.17, n.s.)，「5. これからの生活の中で人とより良い関係を築くために尊重をしたいと思う」（t (76)＝.92, n.s.）で5項目すべて，男女間に有意な差はみられなかった。

②1か月後の男女差

介入群（男子39人，女子39人）に，プログラム1か月後のDV予防の授業についてのアンケートを行った。4件法で「あてはまる4点」，「少しあてはまる3点」，「あまりあてはまらない2点」，「あてはまらない1点」で平均値得点を算出した。「1.DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」は男女の間で有意な差がみられなかった（t (73)＝1.88, n.s.)。「2. 暴力のサイクルの構造を覚えている」では女子が男子より有意に「暴力のサイクル」の構造を覚えている傾向が高かった（t (73)＝2.59, p＜.01)。

4. 考　察

高校生にDV予防の授業を行うことは，DVの知識のみではなく，被害者や加害者にもならない「考え方」の習得に良い影響を及ぼすかを検討した。測定方法として因子分析から得られた「好きな人の意見は最優先するべきだ」というような「関係性の問題」と，「わざと大きな音をたてる」というような，「威圧的行為」を暴力であると認識できているかの2側面で分析をした。

「関係性の問題」においては，介入群の高校生全体，男子のみ，女子のみの分析においてもプログラム後には大きな効果がみられたが1か月後には下がり，プログラム前とほぼ同じ平均値得点であった。須賀ら[4]の中学生の結果では1か月後も下がらずプログラム後の効果を維持できたことから，関係性についての長期的な効果を望むであるならば，高校時代より中学時代にDV予防の授業を受けた方が良いことが考えられる。プログラム後には関係性について理解をしたつもりになるが，長期間を置くと忘れていることから，高校生には段階的に繰り返しの予防の必要性が考えられる。

非介入群においては，高校生全体でも，男子のみ，女子のみの分析においてもプログラム前と1か月後では有意な差がみられなかったことは予測通りの結果であったと思われる。

「威圧的行為」においては，介入群の高校生全体，男子のみ，女子のみの分析においてもプログラム後は効果が有意にあらわれたが，1か月後は有意に下がっていた。「大声で怒鳴ること」，「相手を脅すために物を投げたり，わざと大きな音をたてること」が暴力であることの認識は長期的には維持することは難しかった。中学生においても「威圧的行為」は1か月後には下がっていたことから，普段，威圧的な出来事が起きなければ認識は薄れていくことも考えられるが，万が一のことも念頭において，被害者や加害者にならないための「考え方」を繰り返し学ぶ必要があると思われる。

非介入群においては，高校生全体でも，男子のみ，女子のみの分析においてもプログラム前と1か月後では有意な差がみられなかったことは「関係性の問題」と同様に，予測通りの結果であったと思われる。

高校生がDV予防のプログラムを受けたことにより，男女間で有意な差があらわれた時点は「関係性の問題因子」の「プログラム後」の時点のみで，女子が男子に比べて有意に高く認識をしていた。このことから高校生の女子は「関係性の問題」について，プログラム後の効果は大きいことが考えられる。「威圧的行為因子」では男女間で有意な差がみられる時点がなかった。結果から「威圧的行為」に関する高校生の男女の認識はほぼ同じであることが考えられる。

「プログラム後のアンケート」ではプログラム後の5項目すべてで，男女ともに4点満点で3点以上の平均値得点が得られ，男女間で有意な差がみられた項目もなかった。

「1か月後のアンケート」では「DVのプログラムは自分に良い影響を与えている」では男女間で有意な差がみられなかったが，「暴力のサイク

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト

ルを覚えている」という知識の部分においては，女子が男子に比べて有意に覚えている傾向が高かった。女子が被害者になることが多い現実から，知識においては女子の方が関心が高く，定着することが考えられる。

上記の結果から高校生にDV予防を行うことは，暴力やDVに気づくことができ知識を獲得する方策になると考えられる。しかし高校生が持っている「暴力に対する考え方」は，プログラムにより一時的には大きく変わっても，個人が持っているそのものの考え方を変化させ続けることは時間が必要と思われる。変えようと思っていても日常の生活環境と擦りあわせて行動しなければならないため，考え方も戻ってしまうと思われる。

海外の高校生の研究では，カナダのLavoieらは高校生を対象にプログラムを実施し1週間後には知識と態度が上がったが，6週間後には肯定的変化の割合が半減したことを報告し，米国のAveryらは，高校生の2/3生徒にはプログラムが効果的であったが1/3の生徒には効果がみられなかったことを報告している。またスペインではGaraigordobilらが，プログラム直後の感情の変化の比較を行ったところ介入群と非介入群の間に有意差がなかったことを報告している[6) 7) 8)]。

海外の高校生を対象とした研究を概観してみても，プログラム後は効果がみられるが継続させることは難しいことが示されている。また知識は残るが，感情，態度，考え方を変化させることは難しいことが本研究と先行研究から示された。

本研究の結果から，日本の高校生にDV予防を行うことはDVや暴力に気づく手がかりになると思われる。しかし暴力を否定する意識はあっても内面の部分でDVや暴力に対する考え方を変化させ続けることは難しいことが示唆された。

5．まとめと今後の課題

本研究の結果から高校生に1回でもDV予防のプログラムを行うことは有益であることが示された。しかし生徒の将来を展望しながら，考え方を良い方向に継続させるためにはプログラムの追加を行うことが必要であると考える。

また非介入群は研究校の事情で2回の質問紙調査であった。介入群に時期を合わせて3回の質問紙調査を行えば，プログラムの効果が，より明確に説明できると考える。

謝辞：本研究にご協力頂いた，A高校の生徒の皆様，教職員の皆様に心より感謝致します。

本研究はユニベール財団助成金14-02-140の協力を得て行いました。

文　献

1) 東京都生活文化局: 若者層における交際相手からの暴力に関する調査報告書．2013.
2) 武田道子，大西和子：高校性のデートDVに対する認識および経験の実態：日本看護学会論文集，地域看護42，151-154, 2012.
3) 永松美雪，原　健一，中河亜希，中野理佳：性行動に伴う危険を予防するプログラム効果 - 性感染症予防教育に男女がお互いを尊重する関係を育成する教育を組合せて - ，思春期学，30(4)，365-376，2012.
4) 須賀朋子，森田展彰，斎藤環：中学生のためのDV予防教育プログラム開発と効果研究：思春期学，31(4)，384-393，2013.
5) Antle, B.F., Sullivan D.J., Dryden,A., Karam, E.A., Barbee, A.P.: Healthy relationship education for dating violence prevention among high-risk youth. Children and Youth Services Review, 33: 173-179, 2011.
6) Lavoie F., Vezina L., Piche.C., Boivin., M.: Evaluation of a prevention program for violence in teen dating relationships. Journal of Interpersonal Violence, 10(4): 516-524, 1995.
7) Avery-Leaf,S., Cascardi, M., O' Leary, K.D., Cano, A.: Efficacy of a dating violence prevention program on attitudes justifying aggression. Journal of Adolescent Health, 21: 11-17, 1997.
8) Garaigordobil, M., Maganto, D., Perez, J.I. Sansinenea, E.: Gender differences in Socio emotional Factors During Adolescence and Effects of a Violence Prevention Program. Journal of Adolescent Health, 44; 468-177, 2009.

（受付：平成26年2月10日
受理：平成26年5月16日）

Downloaded from 日本思春期学会 会員専用サイト